

昭和一〇年代における〈日本的なもの〉：横光利一の「厨房日記」から

河田，和子
九州大学大学院比較社会文化研究院特別研究者

<https://doi.org/10.15017/15097>

出版情報：九大日文．12，pp.2-19，2008-10-01．九州大学日本語文学会
バージョン：
権利関係：

昭和一〇年代における

〈日本のなもの〉

——横光利一の「厨房日記」から——

河田 和子
カワタ ワコ

I はじめに

横光は、昭和一一年二月から八月にかけて、東京日日新聞と大阪毎日新聞の特派員としてヨーロッパに渡航し、その体験を『欧州紀行』（創元社、昭二・四）としてまとめ、帰国後最初の小説として『厨房日記』（改造、昭二・一、『欧州紀行』に収録）を發表した。当時「文学の神様」と称された横光だけに、文壇では欧州を見てきた彼がどのような小説を書くのか関心を呼んだのだが、「厨房日記」は、ヨーロッパの知性に対し日本の「義理人情」を述べたりしたことで、周囲を戸惑わせ、不評も買った。宮本（中條百合子は「迷いの末——『厨房日記』について——」（文芸、昭二・二）で、「何かヨーロッパ的でないものを引き出して、これが日本であると云うために、ひどい無理をし」た小説で、「真意を汲むに困難な独特日本の義理人情によって知性を否定する怪々な論」と難じている。留意したいのは、宮本は、「これが日本である」という日本の独自性を言わんと

して、横光が無理に「義理人情」のようなものを言い出したと見ていることである。宮本は、「今日の文学の展望」（『発達日本講座 第一〇巻 現代研究』三笠書房、昭二・一二、発禁措置により未発表^①）でも、「文学における日本的なるものの主観的な横溢の流行は、フランスから帰朝してその第一作『厨房日記』を發表した横光氏の作品が拍車となつて作用した」と述べている。つまり、昭和一〇年前後、〈日本のなもの〉が希求される思想的傾向、所謂〈日本回帰〉と言われる風潮に棹さすものとして『厨房日記』は捉えられており、文壇の寵児たる横光が〈日本のなもの〉に傾斜することの影響を宮本は懸念したのである。

横光が〈日本のなもの〉を問題にするようになったのは何故か。そこに欧州旅行の体験が影響していることは確かだが、当時、横光だけでなく、他の文学者や思想家などの知識人も〈日本のなもの〉について言及していた。寧ろ、同時代の知識人に共有された問題がそこにあつたから、横光は、「厨房日記」や『旅愁』等の小説を書くことで、〈日本のなもの〉について思案し、それを表そうとしたと考えられるのだが、この〈日本のなもの〉とはどういうものなのかを検証する必要がある。

戦後も度々この〈日本のなもの〉という言葉は用いられるが、廣末保は、「近代的な方法や近代的な諸概念によつては解くことの出来ない『日本的な』あるもの」とし、それは心情的・感情的に見出される「前近代の遺産」（解説 そのさまざまを試みにして）、『現代文学の発見 第一巻 日本的なるものをめぐって』学芸書林、昭四三・一二）としている。また、加藤周一は、「日本的な

の「〔知性〕昭三・七」で、「もののははれやわび、さび、枯淡」というような「日本に固有な美的範疇」など「日本的なもの」の概念内容は、江戸時代、国学によって固定されたと述べている。両者とも近代以前の日本の伝統的精神を（日本的なもの）とするが、加藤の場合、戦中の伝統的な方向に純化しようとする日本浪漫派の傾向を批判して、（日本的なもの）の概念を立て直すべく、「日本文化の雑種性」（思想）昭三〇・六）を主張する。が、以下述べていくように、戦前戦中の（日本的なもの）に関する議論を見ていくと、様々な外来文化が日本化されるその雑種性に着目して（日本的なもの）も思案されており、加藤はその点を不問にしている。その結果、（日本的なもの）の議論を立て直そうとしながら、結局、戦中にも展開された議論を反復している。

それに対し、雑居的な日本文化の構造として（日本的なもの）を批判的に分析したのが柄谷行人であり、「日本精神分析」（『日本精神分析』文芸春秋、平一四・七）では、外来文化が保存されながらも原理的なもの排除される日本の精神構造を「日本的なもの」とする。同論では、加藤のいうような雑種的性格も批判的に分析され、移入した文化の外来性が保持されたまま「本質的に内面化されることもない」日本の精神構造を問題にする。けれども、外来の文化、特に西洋由来のものを如何に内面化していくかということが問題にされたことがなかったわけではない。現に、昭和一〇年前後、（日本的なもの）の議論が高まった時、外来の文化を如何に日本化し内面化して新しい日本の伝

統を形成していくかが思案されていたし、一方で、日本文化の雑居的性格を否定し、近代以前の古典に（原日本的なもの）を求めた文学者もいた。後者に当たる保田與重郎などは、「日本的なもの」という言葉を積極的な意味では用いなかったが²⁾、それはこの語自体、前者のニュアンスで用いられることが多かったからだろう。（日本的なもの）を希求した横光と（原日本的なもの）を古典文芸から抽出しようとした保田に、昭和一〇年代の近代主義批判における二つの志向が見て取れるのだが、後者については別の機会に触れたい。ここでは、横光の「厨房日記」やそれに関わる同時代の言説を見ていき、昭和一〇年代の（日本的なもの）の問題機制について概観する。

II 「厨房日記」と日本の知性

横光は、欧州旅行中の昭和一一年七月九日、パリで開催された万国知的協力委員会の講演で、次のように述べている。

われわれの祖先は常に、旧文化に優つた新文化の創造を始めるために、他国の文化の最も長所を、われわれの伝統の中に移植しました。（略）しかしながら、この他国の文化の吸収摂取の加はるに従つて、智識ある日本人の一部の者は、自国の伝統の尊重と模索に気がつき始めたのであります。絶えず伝統が踏み碎かれる島国の中で、伝統とは何かと気附く事、それ自体は悲劇であります。しかし、日本のルネッサンスは、この悲劇から始つて来たのであります。即ち、

他国の文化を受け入れる偏見なき精神と、それらを融合統一する従来の無の精神とは何ら分つべき範疇と必要を持たぬといふ自覚。——これが近代日本の、諸精神の原動力を為すものであります。（我等と日本、「考へる輩」創元社、昭一四・四）³⁾

「智識ある日本人の一部の者は、自国の伝統の尊重と模索に氣付いたというのは、（日本的なもの）の議論が、当時日本で高まつていたことを指し、（日本的なもの）の流行を「自国の伝統の尊重と模索」として認識している。横光自身、「他国の文化を受け入れる偏見なき精神と、それらを融合統一する従来の無の精神」を「日本独特の伝統」として捉えているが、それは和辻哲郎が『岩波講座東洋思潮 日本精神』（岩波書店、昭九・九）で述べていた、次のような「日本の特性」とも一致する。

これらの歴史全体を通じて我々は外国崇拜が日本知識階級の一つの顕著な特性であることを認め得るのである。／＼この特性は日本民族が優れたる文化に対して極めて鋭敏な感受性を持つこと、及びかく感受せるものに対し自己を空しうして学び取るといふ謙虚な態度を持し得ることを示している。これあるが故に孤島日本は、外国との接触が極めて僅かであつたにも拘らず、広汎な東洋の世界の最も優れた文化を咀嚼し、その地盤に於て自ら成育し得たのである。同論文では、「己れを空しうして他国文化を受容するといふ如きことは実際英独仏伊等のどの国民にも見られず、その精神は「世界に比類ない」「日本の特性」だとしている。さらに、

衣食住の生活や信仰、芸術において、古い様式も新しい様式とともに保持され「一つの生活の中に重層的に統一」されている所に「日本文化の重層性」があると述べている。横光の「他国の文化を受け入れ」「融合統一する従来の無の精神」というのも、和辻の言う「己れを空しうして」外国文化を学び取り、「さまざま」な様式は、重層的に一つの生に於て統一「されていく」「日本の特性」に該当する。横光の「厨房日記」には「重層性」という言葉も出てくることから、和辻の日本精神論を意識していたと見られる。昭和一〇年前後において、「日本文化の重層性」という言葉は、和辻の概念用語として、同時代の知識人の間で用いられており、後述するように、三木清も、和辻の指摘した「日本文化の重層性」に言及しながら、（日本的なもの）を思案していた。文化の重層性を「日本の特性」とする見方自体、明治期からしばしば言及されてきたことだが、当時の知識人に共有されていた見方を横光は述べている。

留意したいのは、前の「我等と日本」の引用の少し前で、日本は地震によつて「それまで營々として築いた国民の文化と伝統は、一朝にして、跡形もなくなり」、新しい文化を建設するために、地震の「厄難に襲われる度毎に、他国の文化と伝統の長所を見抜く眼識や、それを吸収咀嚼する才能に、ますます光を加へ」たと述べていることである。「厨房日記」でも、主人公の梶が、シュールリアリストのトリスタン・ツァアラに日本のことを尋ねられ、次のように述べる所がある。

「一回の大地震でそれまで營々として築いて来た文化は一朝に

して潰れてしまふのです。すると、直ちに国民は次の文化の建設を行はねばならぬのですが、その度に日本は他の文化国の最も良い所を取り入れます。一世代の民衆の一度は誰でもこの自然の暴力に打ち負かされ他国の文化を継ぎます訓練から生ずる国民の重層性は、他のどの国にもない自然を何より重要視する秩序を心理の間に成長させて来たのです。(略)このやうな習慣の中に今ヨーロッパの左翼の知性が侵入しつつあるのですが、しかし、これらの知性は日本とヨーロッパの左翼の闘争対象の相違について考へません。(略)日本の左翼は日本独特であるところの秩序といふ自然に対する闘争の形となつて現れてしまつたのです。これはどうしたつて絶対に負けるのは左翼です。つまり、それは自然に反するからなんです。」

引用前半は、先の講演内容とも重なつており、「他国の文化を受け入れ」「融合統一する伝来の無の精神」が、「厨房日記」では「自然を何より重要視する秩序」の「心理」として語られている。地震については関東大震災が念頭にあり、震災後に「国民は次の文化の建設」を行うべく「他国の文化を継ぎます」というのも、直接には、大正末から昭和初期にかけての日本の社会・文化状況を意識して述べている。震災後に展開された日本のモダニズム自体「他国の文化を継ぎたす形」で成されてきたもので、その結果「伝統が踏み碎かれる」(我等と日本)ことにもなつた。つまり、日本のモダニズムに対する自己批判の形として「伝統」が顧みられ、(日本的なもの)とは何かという

ことが問題にされたのである。⁴⁾

左翼の問題に触れているのも、震災後、新感覺派などのモダニズム文学とともに台頭してきたことが関係するが、この左翼を敗退せしめた「自然」とは何か。「日本独特であるところの秩序」とされていることから、天皇制や日本の国体を含意していると読むことも可能だろうが、想起したいのは、『日本の思想』(岩波新書、昭三六・一)で丸山真男が、日本の思想的「伝統」として、原理的に相反する思想も包容する雑居性を指摘し、その伝統とは異質なものとして、キリスト教とマルクス主義を挙げていたことである。丸山は、和辻の指摘した日本文化の重層性を批判的に捉え、「雑居的寛容」の特質が、原理的な思想の形成を妨げているとして、次のように述べる。

あらゆる哲学・宗教・学問を――相互に原理的に矛盾するものまで――「無限抱擁」してこれを精神的経歴のなかに「平和共存」させる思想的「寛容」の伝統にとつて唯一の異質なものは、まさにそうした精神的雑居性の原理的否認を要請し、世界経験の論理のおよび価値的な整序を内面的に強制する思想であつた。近代日本においてこうした意味をもつて登場したのが、明治のキリスト教であり、大正末期からのマルクス主義にほかならない。(略)右のような要請をこの風土と妥協させるならば、すくなくとも精神革命の意味を喪失し、逆にそれを執拗に迫るならば、まさに右のような雑居的寛容の「伝統」のゆえのはげしい不寛容にとりまかれるというディレンマを免れないのである。

キリスト教やマルクス主義は、原理的なものとして「精神的雑居性」を否認する。それ故、日本では「雑居的寛容の『伝統』」に反するものとして、骨抜きにされるか排除されることになつてしまふ。丸山の見方に即していうなら、「雑居的寛容の『伝統』」に反するものとしてマルクス主義が敗退したことを横光は認識していたことになる。もつとも、横光は丸山の言うような「精神的雑居」を「自然」な状態と見たのではない。外来文化の雑居状態が融和的に統一され日本化されていくことを「自然」と見なしているのである。

だが、「他国の文化を受け入れ」「融合統一する」ことで「本来的なもの」が創出されていくことが「自然」とする見方自体、問題がないわけではない。「厨房日記」では、「義理人情」という言葉が唐突に用いられているが、その「義理人情」とは「個人」が「意志的に無になる」ことを意味しており、それが「自然」なこととする。

「日本人は社会の秩序を何より重んじるから、自然に個人を無にしなればならぬ。つまり、生活の秩序を完成さすためには人間は意志的に無になる度胸を養成しなければならぬ。日本文化の一切の根柢はこの無の単純化から映き出したもので、地球上の総ての文化が完成されればこのようになるものだといふ模型を造つてゐるやうな社会形態が、日本だと思ふと云つてくれないか。つまり知性の到達出来る一種の限界までいつてゐる義理人情の完璧さのために、も早や知性は日本には他国のやうには必要がないのだと思

ふ。」

「生活の秩序を完成さすためには人間は意志的に無になる」というのは、他国の文化を「融合統一する従来の無の精神」と同じことを意味している。つまり、他国の文化を「融合統一」していくにあたり、「個人」は「意志的に無になる度胸」＝「義理人情」が「自然」に養成されていくというわけだが、それが何故「自然」なのかは問われない。したがって、秩序のために自己を無にすることが「自然」と思わせるようなイデオロギーや社会システム（＝天皇制や日本の国体）が存在していることも意識されない。「意志的に無になる度胸」を「義理人情」としていても、読者に誤解や混乱を生じさせやすく、ヨーロッパの知性とは異なる「日本特有の知性」として無私の「義理人情」を説く。それ故に、宮本から「知性を否定する怪々な論」（前出）と手厳しく批判されたのである。

宮本が言う知性は、国際的な論理性を要するものだが、「義理人情」自体、適切な表現ではなかつたらう。横光は、知性そのものを否定したのではない。梶は、「種族の知性を論理の国際性より重んじる」が、それは「種族の国際性を愛するから」で、日本の中から世界に通じるものも見出そうとしていた。座談会「現代日本および日本人を語る」（改造 昭二・五）でも、横光は、「義理人情」について「日本人の直感的科学」と述べており、論理＝科学と心情的なものとが一致する所に日本的な知性、思考を見ようとして「義理人情」という表現を用いている。そのように横光が、日本的な知性を思案したのも、当時の

文学者や知識人らが、外来文化の日本化Ⅱ（日本的なもの）の創出を問題にしていたことが関係するのだが、そこで昭和一〇年前後の（日本的なもの）の議論が、実際どのようなものだったのかを見ておかなければならない。

Ⅲ 昭和一〇年前後の（日本的なもの）の流行

昭和一〇年前後、（日本的なもの）に関する議論が高まり、「思想」昭和九年五月号や「理想」同年一二月号では「日本精神」に関する特集が組まれている。昭和一二年三月から五月にかけては、新聞や雑誌等で、集中的に（日本的なもの）に関する評論、エッセイが発表されており、昭和一二年六月には、渡部政盛の『日本的なるものゝ研究』という著書も啓文社から刊行されている（後に付す（日本的なもの）に関する主要文献一覧を参照）。

「日本的なもの」や「日本的なるもの」⁵⁾という言葉は、明治大正、及び昭和三年頃まで殆ど見当たらないが、昭和七、八年になるとこの用語が頻繁に使われるようになる。それは、満州事変後、日本のファッショ的傾向とともに、日本についての言及や研究が盛んになってきたことを示しているが、当時、知識人の間にファシズムの台頭に対する懸念や抵抗感がなかったわけではない。「支那事変」前までは、左翼思想家において（日本的なもの）に対する警戒心も強く、（日本的なもの）に言及すればファッショに迎合していると非難されやすい状況だった。「日本主義」、「日本精神」といった語は国粹主義的、ファ

ッシヨ的なニュアンスで捉えられやすい為、政治的意味合いで解されることを避けるべく、「日本的なもの」や「日本的なるもの」といった用語が使われることもあったし、進歩的な方向で（日本的なもの）を探究することで、国粹主義的思潮やファシズムに対抗しようとした者もいた。『日本イデオロギー論』（白揚社、昭一〇・七）で、日本の文化情勢がファッショ化したことを難し、ファシズム批判を展開した戸坂潤も、当初は（日本的なもの）に関する議論を批判していた。しかし、「日本の民衆と『日本的なるもの』（改造）昭一二・四）では、「日本的なもの」に特殊な興味を示すことが、それだけでは決して保守的でも反動的でもなく、却つて具体的に進歩的であることを意味すべき場合がある」とし、民衆こそが（日本的なもの）であると述べるようになる。彼の場合、（日本的なもの）を進歩的に解することで、ファシズムに対抗しようとしたのだが、そうした姿勢は、「日本主義」を「民族主義」と同一視してそれを警戒していたマルクス経済学者・向坂逸郎にも見て取れる。向坂は、前出の座談会「現代日本および日本人を語る」（横光も参加）で、「日本に関心をもち、日本を反省するといふことは必ずしもさういふ意味（引用者注、「民族主義」を指す）をもつて」おらず、「一歩先に進んでゐる」ものとして「日本的なもの」を見直すことには反対ではないと語っている。

そもそも（日本的なもの）とは何なのか、それは日本の伝統や民族の特性をどう認識するかという他者（西洋）に対する自己認識の問題でもあるから、（日本的なもの）が何か実体とし

て存在するわけではない。佐藤春夫は、「民族的な情趣、『ものあはれ』の伝統」が日本文学の中樞をなすと見ており（『日本文学の伝統を思ふ』、「中央公論」昭二・一）⁶⁾、中河與一は、万葉集に「壮烈雄渾の気風」を見て「万葉への回帰」を説いている（『万葉ギリシヤ』、「万葉の精神」千倉書房、昭二・七）。日本の伝統的美意識や古典に（『日本のなもの』と見ようとするとする者もあれば、戸坂潤のように「日本の民衆こそ唯一の日本的なるもの」（『日本の民衆と『日本のなるもの』前出）として民衆の解明をすべきとする者もいる。⁷⁾

が、（『日本のもの』）についての議論が高まる中、総じて、（『日本のもの』）とは何かについては、抽象的で曖昧な言い方に留まっていた。⁸⁾ 大森義太郎の「日本への省察——『日本的』とは何ぞや」（『文芸春秋』昭二・四）では、『『日本的』なもの』の一覧表として、「自然愛」「義理人情」などの特徴を二四にわたって列挙し、『『日本のもの』が結局「形式的」「無規定」で曖昧にならざるを得ない点を批判的に指摘していた。横光が「厨房日記」で、「義理人情」を日本的な知性としていたのも、（『日本的なもの』）の一例として考えられていたことによる。

（『日本のもの』）が曖昧で形式的、抽象的なものとならざるを得ないのは、日本人に共有された心性や美意識など共同主観的なものを抽出しようとしたからだ。当時の知識人の一般的認識として、雑居した外来文化が日本化されることで（『日本のもの』）が創出されると考えられたからでもある。特に、（『日本のもの』）をファシズムや「封建的」なものと思わずことに

異議を唱えていた三木清は、「日本的性格とファシズム」（『中央公論』昭一・八）⁹⁾で、「日本のものは形のない」「無形式の形式」だと述べている。（『日本のもの』）に形が無いのは、渡部の『日本的なるもの』研究（前出）で次のように述べられているように、それは歴史の「ルツボ」から出てきたもので、時代の変化とともに形態が変わると考えられたことによる。

歴史は文化の熔鉱炉乃至精撰機の如きものである。最初材料としてその中に摂取せらるゝは固有文化である。次いで世界のあらゆる文化を摂取し、国民生活の試練と云ふ熱を加へる。すると固有文化中の必要不可欠なものと、外来のものゝ中民族生活を進歩発展せしむる上に価値あるものが溶解し合つて次第に結成し、その文化をして拡充せしめ、然らざるもの即ち固有文化中無生物となつたものや、外来文化中民族性に合致せざるものは排除せられ、そこに不断の精錬が施される。（略）今日日本のものとして吾々の中にあるもの亦、実にかうした過程を経て、歴史と呼ぶるゝルツボの中から出て来たものと云ふことが出来る。

外国の文化が日本化されて（『日本的なもの』）となった例としてよく挙げられるのが、印度、「支那」から移入され、祖先崇拜の神道と結びついた日本の仏教だ。それに対して、西洋から移植した科学や芸術文化は、また十分に日本化されてない為、（『日本のもの』）は見られず、如何に（『日本的なもの』）を創出していくかが問題にされたのである。三木は、「日本的性格とファシズム」で、こう述べている。

日本文化は固より外国文化の単なる模倣でなく、固有性と獨創性とに欠けてゐないに拘らず、その歴史が支那文化、仏教思想、西洋文化、そしてそれらの種々異なる要素の次から次への模倣の歴史であるかのやうに見えるといふことも、右の如き日本の性格の然らしめるところである。更に無形式の形式といふ日本の性格のうちに和辻哲郎が指摘されたやうな日本文化の重層性といふものも理解し得るであらう。今日においても神社崇拜と仏教的信仰とは多数の日本人にとつて同時に可能なこととなつてゐる。(略) 言い換へれば、新しいタイプの日本人が生れ、新しいタイプの文化を生産しなければならぬ。(略) この場合我々は単に過去の伝統的な文化の形式を踏襲することに満足することができないとすれば、西洋文化の徹底的な研究と同化を見棄て得ないのみでなく、寧ろこの方向に突き抜けることによつてそれを求めるのほかないと思はれる。(略) 西洋文化の輸入以後真に日本的なものが生れるためには、例へば仏教が最初日本に移植されて鎌倉時代において日本の仏教が開花するまでの期間に比してみても、あまりに短時日なのである。

この「無形式の形式といふ日本的性格」について、三木は「相反する多様なものを同時に存在させ得るといふ日本の精神」と述べている。それは和辻のいう「日本文化の重層性」に通じる見方だが、「儒教や仏教のうちに日本的性格を作り上げた」とする三木は、「西洋文化の輸入以後」にも「日本的なもの」

が生れるはずであり、それは「新しいタイプの文化」の創造であるとす。つまり、輸入文化の日本化(「日本的なもの」の創出(「表現」)が、西洋文明の影響を受けてきた日本の新しい伝統形成の問題として考えられていたのである。

もつとも、こうした外来文化の日本化に日本の独自性を見ようとする議論自体、昭和一〇年前後に出てきたものではない。日本主義的思潮が高まつていた日清・日露戦争前後も話題になつたことである。明治三〇年五月に、井上哲次郎、木村鷹太郎、高山樗牛らが創設した大日本協会の機関紙「日本主義」が発行されるが、その「発刊の主意」には、「外来の潮流に压倒せらるゝことなく、能く之れを同化して、己れが発達を裨補し、反りて己れが培養せる所の結果によりて世界に貢献する所あらん」ことが「自主独立の精神」だとされている。外来文化を同化(日本化)することが日本の独自性と世界性を主張することに繋がっている。また、岡倉天心は『東洋の理想』(一九〇三年二月、ロンドンのジョン・マレー書店から刊行)で、印度・「支那」の芸術文化を保存している日本を「アジア文明の博物館」(岡倉「雄編『岡倉天心全集』第一巻、聖文閣、昭一〇・一二)と述べていた。日本の西洋化とその揺れ戻しのような形で見られる日本主義的傾向は明治期以降反復して見られるものである。だが、昭和一〇年代に(「日本的なもの」が問題にされた背景には、ヨーロッパ文明の危機意識と知識人の自己喪失感があり、その点ではそれ以前の日本主義的思潮とも異なっている。

IV ヨーロッパの知的危機と〈近代の超克〉

ヨーロッパの危機意識と〈日本的なもの〉の希求との関わりは、昭和一〇年代の知識人の思想的動向を総体として表していた萩原朔太郎の「日本への回帰」(いものち) 昭二・二二、「日本への回帰」白水社、昭二・三三⁽¹⁰⁾からもうかがえる。〈日本的なもの〉への志向を「日本回帰」という用語で示すようになったのも、このエッセイのタイトルに由来する。〈日本的なもの〉の流行に呼応する形で書かれたものであり、僕等「知性人」の問題として、朔太郎は次のように述べている。

日本人は、未来もし西洋文明を自家に所得し、軍備や産業のすべてに互つて、白人の諸強国と対抗し得るやうになつた時には、忽然としてその西洋崇拜の迷夢から覚め、自家の民族的自覚にかへるであらうと、ヘルンの小泉八雲が三十年も前に預言してゐる。そしてこの詩人の預言が、昭和の日本に於て、漸く現実されて来たのである。(略) 僕等はあまりに長い間外遊して居た。そして今家郷に帰つた時、既に昔の面影はなく、軒は朽ち、庭は荒れ、日本的なる何物の形見さへもなく、すべてが失はれてゐるのを見て驚くのである。僕等は昔の記憶をたどりながら、かかる荒廃した土地の隅々から、かつて有つた、「日本的なるもの」の実体を探さうとして、当もなく侘しげに徘徊してゐるところの、世にも悲しい漂泊者の群れなのである。

朔太郎が「日本的なものへの回帰」について述べるようになって

たのは、明治期、列強諸国に対する自衛の措置から開国して以来、西洋文明を移入することに邁進し、西洋崇拜の夢から醒めた時には「日本的なる何物の形見さへもなく」なつてしまつたという喪失感による。僕等「知性人」は、「浦島の子がその魂の故郷を求めようとして、海の向うに龍宮をイメーヂし」「西洋といふ蜃気楼のユートピアを夢みて」いたが、その蜃気楼Ⅱ「西洋の凶」も幻滅し、「現実の故郷」たる日本を省みた時には、「汽車を走らし、電車を走らし、至る所に俗悪なビルヂングを建立して居る」西洋の「模写の形」しか残つていなかった。そこに、西洋的な知性を身につけた知識人の悲哀と寂寥がある。

前述した三木の見方によれば、こうした喪失感は、西洋から移植した文化が雑居する状態に留まり、日本化が十分なされていないことによるのだが、〈日本的なもの〉の流行に、こうした喪失感があつたことは注意したい。ここで意識されている〈日本的なもの〉とは、小泉八雲の名も登場するように、ラフカディオ・ヘルンが評価した近代以前の古き日本だが、「日本への回帰」で喪失したと意識されているのは、その古き日本だけではない、西洋への憧れも醒めて「迷夢」となつてしまつてゐる。かつて心酔した西洋のイメージも蜃気楼として消え、ヘルンが賞賛したような日本の伝統も既に失われて、魂の漂泊者とならざるを得ない「知性人」、即ち日本の知識人の二重の幻滅感、喪失感が語られている。この二重の喪失感から、「日本の失はわれた青春を回復」すべく、「日本的なるもの」の探求がなされるのであり、西洋の影響を受けてきた「僕等」知識人に共通

する心情と認識が「日本への回帰」で述べられていた。

こうした背景に、日本の知識人の間でも問題にされ出した、第一次世界大戦後のヨーロッパ文明の危機、没落意識がある。¹¹⁾ 大戦後、オスワルド・シュペンラーの『西洋の没落』（一九一八年ウィーンで刊行、日本では、一九二六年村松正俊の訳で批評社から刊行）が出版されるが、ヨーロッパの危機意識が日本で話題になるのは、大正末から昭和初期にモダニズム文化が流入して後のことである。昭和五年にポール・ヴァレリーの「精神の危機」（一九一九年四月、五月にロンドンの *Anchor* 誌に掲載された後、フランスの N・R・F 誌に載ったもの）が中島健蔵と佐藤正彰の共訳で「作品」昭和五年九月、一〇月号に紹介され、昭和九年にはシエストフの不安の哲学が日本の知識人の間でも流行した。また、昭和一二年「日本評論」の三月号には、ベルリン大学の著名な哲学教授エドワード・シュプランガーの「西洋文化の没落か、復興か」（小塚新一郎訳）が掲載されたが、シュプランガーは、大戦後のヨーロッパの危機を問題にしたシュペンラーの視点を継承しながら、一九三〇年代現在の問題として世界恐慌後の経済的、精神的危機を捉え、その根因を機械的思考に見ていた。

要するに、昭和四年の世界恐慌後、西洋の知的危機（に關わる言説）が日本の知識人の間で目を引く所となり、（日本的なものの）議論も高まるのだが、モダニズム文化の流入後、ヨーロッパの危機意識に触発される形で、日本的近代の矛盾や知識人の混迷、自己喪失の問題が意識され出したのである。モダニズムの芸術運動自体、世界同時性を持った形で日本に移植された

が、その延長線上でモダニズム批判もなされている。大正末から昭和初期のモダニズムの特徴として挙げられるのは、資本主義的な生活の発達⇨都市化と機械主義であるが、関東大震災後の復興が目指されて、「西洋の図が、その拙劣な模写の形で、汽車を走らし、電車を走らし、至る所に俗悪なビルディングを建立して居る」（日本への回帰）前出 状況が現出したのである。「日本的なる何物の形見さへ」なく、西洋の「拙劣な模写の形」により「一切の文化は喪失されてる」と認識されるようになるのも、モダニズム文化到来後のことである。そうした日本のモダニズムに対する批判から「日本的なるもの」への回帰を、「僕等」⇨「知性人」の問題として説いたのが、朔太郎の「日本への回帰」だったのだが、自己の思想的基盤を持ち得ない「漂泊者」たる日本の知識人の問題も認識されている。このエッセイでは、帰るべき「日本」（⇨「日本的なもの」）など何処にも実在しないことも意識されており、西洋心酔者の喪失感がアイロニカルに語られているのである。

それは、横光がモダニズムに対する反省から日本の「伝統」や日本の知性⇨（日本的なもの）を顧みるようになるのと軌を一にしている。前出の「我等と日本」でも、「日本のルネッサンス」⇨日本のモダニズムは、それ以前の日本の伝統を無視して移入され、震災後の復興の為にはやむを得なかった所はあるものの、「絶えず伝統が踏み碎かれる島国の中で、伝統とは何かと気附」かされる所に日本の知識人の「悲劇」もあると認識していた。それ故、横光においては、西洋の思想や科学をいか

に日本化し、新しい日本の伝統Ⅱ（日本的なもの）を創出Ⅱ表現していくかが文学の課題になっていた。

このように、日本のモダニズムに対する反省は、ヨーロッパ人の危機意識に由来しているが、明治期から西洋の影響を強く受けてきただけに、日本の知識人の間では、ヨーロッパ文明の危機に対してどう対応すべきかが問題となり、（日本的なもの）が求められるようになるのである。換言すれば、西洋（Ⅱ他者）の危機に対して日本の自己認識が問われ、（日本的なもの）が思案されたのである。

しかし、こうした（日本的なもの）の希求は、結局新しい伝統や思想を形成するには至らなかった。それは、（日本的なもの）の問題機制自体、日本的な近代の問題でありながら、「大東亜戦争」下、西洋的な近代を如何に超克するかという方向にシフトしたことに起因しているよう。そうしたシフトが生じたのも、乱雑に移入された西洋文明によって、日本の知識人は精神的な混乱に陥っていると認識し、その精神的混乱を克服しようとしたからである。昭和一七年に「文学界」でなされたシンポジウム「近代の超克」⁽¹²⁾では、西洋的な近代の超克が志向されるとともに日本的近代も省察されているが、その参加者だった音楽家の諸井三郎は、「吾々の立場から」（河上徹太郎他『知的協力会議 近代の超克』創元社、昭一八・七）で、次のようなことを述べている。

我が日本に於ける近代とは、西洋文明の輸入によつて生じた玉石混淆の混乱状態で、独特な特質を持つ文化現象であ

る。（略）乱雑に輸入せられた西洋文明の模倣によつて惹き起された混乱自体なのである。このような状態は当然清算せらるべきであり、殊に日本人の如き同化力強く、そこから自分自身の文化を生み出して行く優れた能力に恵まれた国民の場合には、必ずやこの混乱を征服すべき国民的自覚の秋が来るのである。

「西洋文明の輸入によつて生じた玉石混淆の混乱状態」とは、西洋文明の急速な移入、模倣によつて無秩序な文化的雑居状態が生じ、知識人の中に精神的混乱を招いたことを述べている。シンポジウム参加者の中村光夫も「急激に強制された応接の暇のない西洋文化の輸入のために、僕等の精神が消化不良を起した」（『近代』への疑惑、「知的協力会議 近代の超克」収録）としており、亀井勝一郎もそれを「精神の危機」（現代精神に関する覚書、「知的協力会議 近代の超克」収録）として問題にしていた。その精神的混乱を克服すべく、西洋的近代の超克が主張されるのだが⁽¹³⁾、諸井の場合、この混乱の克服は西洋文明の日本化Ⅱ同化によつてなし得るものとされている。つまり、（日本的なもの）を創出することで、文化的な無秩序状態も克服出来ると考えられていた。

（日本的なもの）の創出によつて西洋的近代を超克しようとする志向は、シンポジウム「近代の超克」の参加者ではないが、超近代的な方向でヨーロッパ的な近代を克服しようとした（近代の超克）論者、船山信一の「近代の超克と科学精神」（『科学思潮』昭一八・四）にも見て取れる。

西洋的な科学を如何に日本化するかといふところに、良心的な科学論の問題がある。(略)純粹に日本的なものを宣揚すると共に、本来西洋的、近代的なものを日本的、超近代的なものに転化させるといふ仕事がつきまとうのである。

(略)思想が客観的な知識によつて媒介されねばならないといふところに、日本世界観の確立、近代主義の超克を志向するものが、科学技術の問題と真剣に取り組まねばならない所以があるのである。

ここでは「日本的なもの」という用語も使用され、「日本世界観の確立、近代主義の超克」が志向されている。船山は、西洋由来の科学知識を否定する主張も強まっていた中、その科学を日本化することで西洋の近代主義を超克しようとしており、科学主義の超克を志向した横光とも通じる所がある。西洋的なものの日本化(「日本的なもの」)を創出することが、西洋の近代も乗り越えていくことにも繋がり、昭和一〇年代の(「日本的なもの」)の問題機制は、(「近代の超克」)論議において、西洋由来の「近代主義の超克」へと展開されていくのである。このような方向で西洋の近代の超克へと横滑りするのには、モダニズム批判自体、世界的同時性を意識して展開されたことに由来する。

そうしたことから鑑みても、横光の『旅愁』が「近代の超克」論議に呼応する形で展開されたのは必然であつたし、それについては別稿でも論じた。¹⁴⁾『旅愁』の連載(東京日日新聞・「大阪毎日新聞」、後に「文芸春秋」や「文学界」に断続的に発表)は、(「日本的なもの」)の議論が最も盛んであつた昭和一二一年四月一四日か

ら始まつている。このテクストでは、西洋派の科学主義者・久慈と日本派の矢代の論争が描かれるとともに、矢代は、恋人の千鶴子が信仰するキリスト教といかに折れ合うか、信仰上の対立で煩悶する。結局、矢代は、思想的対立を乗り越える新しい原理を模索し「古神道」に傾倒していくのだが、それは、外国から移入したものを吸収・同化(日本化し、新しい伝統(「日本的なもの」)を創出する試みでもあつた。丸山真男は、「思想と思想との間に本當の対話なり対決が行われないような『伝統』の変革なしには、およそ思想の伝統化はのぞむべくもない(『日本の思想』)と述べているが、その意味では、日本に移入された思想の原理的対立を問題にした『旅愁』は、文学において「思想の伝統化」を試みようとしたものだったのではないか。

もっとも、『旅愁』も、西洋的近代の危機(「西洋由来の科学主義の行き詰まりも乗り越えるものとして、「古神道」を思索し、その世界性を説くあたり、自己言及的な議論に陥り、新たな日本の知性や伝統を創出(「表現することには成功しなかつた。昭和一二年から二一年まで書き続けられた『旅愁』が、結局未完のまま終わったのは、当時、日本の知識人の間で、日本の新しい伝統や思想形成が試みられながら、結局果たしえなかつたことを象徴的に示している。丸山真男が問題にした日本文化の雑居性も、昭和一〇年代に浮上した(「日本的なもの」)の問題機制を戦後の視点から考え直そうとしたものにほかならない。それは、日本(「共同体における(「自己」)表現、(「自己」)形成の問題に繋がっていたのだが、戦後も未解決のまま残されて

おり、それ故に現代においても問われている問題なのである。

【参考】

昭和初年・一〇年代の〈日本的なもの〉に関する主要文献一覽
(昭和元年〜一九年)

【凡例】

一、昭和初年から一九年にかけて、雑誌や新聞等に掲載されたエッセイや評論、座談会、及び著書について、そのタイトルに「日本的なもの」や「日本的なるもの」という言葉が出てくるもの、もしくは、本文中に同用語や同類語(「本格的性格」等)が見られるものを発表年月順(和暦)に並べた(著者、タイトル、雑誌・新聞名もしくは発行所、発行年月の順)。ただし、昭和元年から三年までは「日本的なもの」に類する用語を見つけることが出来なかつたので、昭和四年から資料を挙げている。

一、雑誌や新聞に掲載されたものは「」、著書については『』でタイトルを表記した(丸括弧内の「」は雑誌又は新聞名、著書は出版社、及びそれぞれの発行月)。座談会については、出席者をすべて列挙した。

【昭和四年】

野上豊一郎「表現の日本的なるもの―能の蘭位について―」
(「思想」六月)

【昭和七年】

野上豊一郎「映画と能と日本的なるものと」(「思想」二月)
青野季吉「文芸時評『日本的なるもの』フアツシヨ風潮の一産物」(「東京朝日新聞」三月二八日)

谷川徹三「文芸時評 修業と技巧 文芸に於ける日本的なるもの」
(「中央公論」四月)

【昭和八年】

紀平正美「日本精神の特色」(「理想」一月)
影山正治「日本主義文学理論確立のために」(「日本主義文学」五月)
塩田良平「明治文学に於ける日本的なるもの」(「文学」八月)
柳澤健「日本発見」(「日本評論社」八月)
友枝高彦「日本のなるもの特質」(「道德教育」一〇月)

【昭和九年】

矢部貞治「現代日本主義の考察」(「理想」一月)
藤沢親雄「日本精神の現代的意義」(「理想」一月)
河野省三「現代日本思想の動向」(「理想」一月)
西村真次「古代日本人の性格」(「理想」一月)
松永材「祖国意識への道」(「理想」一月)
瀧澤真弓「『日本的なもの』とは何か」(「国際建築」一月)
瀬沼茂樹「現代小説における『日本の特性』」(「文芸」二月)
金原省吾「絵画に於ける日本的なるもの」(「思想」五月)
須永克己「音楽に於ける日本的なるもの」(「思想」五月)
堀口捨己「建築における日本的なるもの」(「思想」五月)
和辻哲郎『岩波講座 東洋思潮 日本精神』(「岩波書店」九月)

柳沢健 「日本芸術の国際性について」(「新潮」二月)

【昭和一〇年】

長谷川如是閑 『日本の性格』の再検討」(「改造」六月)

勝本清一郎 「芸術上の日本の性格とは？」(「文芸」七月)

戸坂潤 『日本イデオロギー論』(白揚社、七月)

三木清 「日本文化と外国文化」(「セルバン」八月)

三枝博音 「日本文化の特質」(「日本評論」一〇月)

【昭和十一年】

長谷川如是閑 「文化的表現から見た日本の性格」(「改造」二月)

三木清 「日本の性格とフアシズム」(「中央公論」八月)

岸田国士 「日本に生れた以上は」(「文学界」八月)

林房雄 「日本への愛情」(「文学界」八月)

長谷川如是閑 「日本の文化感覚の特徴」(「日本評論」八月)

社説 「日本的と日本そのもの」(「東京朝日新聞」八月十五日)

保田與重郎 「開花の思想——日本的といふこと——」(「帝国大学新聞」九月二八日)

保田與重郎 「日本の橋」(「文学界」一〇月)

佐藤春夫・秋田雨雀・川端康成・岡邦雄・林房雄・保田與重郎・

船橋聖一 「日本の文化的現状 日本について」(「文学界」一〇月)

金原省吾 『表現の日本の特性』(古今書院、一〇月)

河上徹太郎 「日本のなもについて」(「俳句研究」二月)

志田延義 「芭蕉に於ける伝統の意味」(「俳句研究」二月)

志田延義 『日本のなるもの』の追求其の他」(「解釈と鑑賞」二月)

【昭和十二年】

伊豆公夫 「叙事詩と叙情詩・我が古典時代に於ける」(「唯物論研究」一月)

佐藤春夫 「日本文学の伝統を思ふ」(「中央公論」一月)

中條(宮本)百合子 『迷いの末』——『厨房日記』について

——(「文芸」二月)

河上徹太郎 「日本と西洋の知性について——横光利一外遊論

——(「文芸」二月)

保田與重郎 「明治の精神——二人の世界人——」(「文芸」二月)

杉山平助 「日本のなももの 中條百合子の妥当性」(「東京朝日新聞」

二月二七日)

保田與重郎 「明治の精神——御階の櫻——」(「文芸」三月)

片岡鉄兵・窪川鶴次郎・中野重治・小林秀雄・三枝博音・河上

徹太郎 「現代文芸思潮の対立——民族文化の問題を中心に

——(「文芸」三月)

尾崎士郎 「高言放談——大乗的生活、生活の浪漫派、日本的性

格——(「文芸」三月)

青野季吉 『日本のなももの』と我等」(「文芸」三月)

矢崎弾 『もののはれ』の錯乱——伝統への疑問符——(「文

芸」三月)

甘粕石介 「芸術に於ける日本的なももの」(「中央公論」三月)

中條百合子 「文学に於ける日本的なももの」(「文芸春秋」三月)

中島健蔵 「文学と民族性に就いて」(「改造」三月)

亀井勝一郎 「日本的なももの将来」(「新潮」三月)

小林秀雄 「文芸時評 論壇の迷子 日本的なももの」(「読売新聞」

三月七日)

岡本かの子「女の立場から 日本的なるもの」(『読売新聞』三月

二三日)

林房雄「文芸時評 新日本主義論争の意義」(『読売新聞』三月

二八日)

三木清「教養論の現実的意義」(『改造』四月)

向坂逸郎「政治と文化の相克」(『改造』四月)

戸坂潤「日本の民衆と『日本的なるもの』」(『改造』四月)

高沖陽造「現代文芸批評家論」(『中央公論』四月)

大森義太郎「日本への省察——『日本的』とは何ぞや——」(『中

央公論』四月)

三木清「知識階級と伝統の問題」(『中央公論』四月)

三木清「日本の知性について」(『文学界』四月)

保田與重郎「(『日本的なもの』) 批評について——文芸三月号に現

れた『日本的なもの』についての総括批評——」(『文学界』四月)

保田與重郎「勝利の悲哀——明治の精神——」(『文芸』四月)

安倍能成「東と西——ブルーノ・タウト氏の日本に関する著述

に因みて——」(『文芸』四月)

徳田秋声・河上徹太郎・春山行夫・板垣鷹徳・武田麟太郎・

杉山平助・窪川鶴次郎・広津和郎・中村武羅夫「日本精神及

び文化とは何か」(『新潮』四月)

保田與重郎「混乱は展けない」(『新潮』四月)

小林秀雄「『日本的なもの』の問題」(『月刊文章』四月)

中條百合子「ヒューマニズムの諸相」(『雑記帳』四月)

中條百合子「今日の文学の鳥瞰図」(『唯物論研究』四月)

中條百合子「プロ文芸の中間報告」(『グラフィック』四月一五日)

小林秀雄「『日本的なもの』の問題」(『東京朝日新聞』四月一六—一九日)

本多顕彰「文芸時評 日本人的感覚 知性の立場」(『読売新聞』四

月二八日)

島木健作「日本への愛」(『新潮』五月)

佐藤春夫・島津久基・雅川澁・萩原朔太郎・吉田絃二郎・川端康成・

舟橋聖一・中村武羅夫「古典に対する現代的意義」(『新潮』五月)

森山啓「『万葉に還れ』の意義」(『文芸』五月)

林房雄「日本主義論争の鍵」(『文芸』五月)

本田喜代治「文化の交錯と文芸——『日本的なもの』の論議を

中心として——」(『文芸』五月)

小泉丹・向坂逸郎・辰野隆・新居格・林房雄・武者小路実篤・

横光利一「現代日本および日本人を語る」(『改造』五月)

本多顕彰「文学と『日本的なもの』」(『日本評論』五月)

安倍能成「『日本的なるもの』に就て」(『日本評論』五月)

三枝博音「知の日本的性格」(『日本評論』五月)

猪俣津南雄「日本のなものゝ社会的基礎」(『中央公論』五月)

保田與重郎「現代のために」(『三田文学』五月)

豊島與志雄「槍騎兵 思考の困難」(『東京朝日新聞』五月八日)

長谷川如是閑「日本の芸術の行方」上・中・下(『読売新聞』五月

一五・一六・一八日)

豊島與志雄「槍騎兵 断層がある」(『東京朝日新聞』五月二五日)

長谷川如是閑「日本哲学の形態的特徴」(『改造』六月)

浅野晃 「現代日本の『西洋と日本』——『日本的なもの』の問題の所在に就て——」(改造) 六月

久松潜一 「国文学と日本的なるもの——主として表現態度の上から——」(中央公論) 六月

高見順 「批評と小説の背馳に就いて——文芸時評——」(新潮) 六月

坂田徳男 「日本のと科学的」(日本評論) 六月

森田草平 「『日本的』なもの」(日本評論) 六月

渡部政盛 「日本的なるもの、研究」(啓文社) 六月

三木清 「貧苦と危機」(文学界) 六月

中河與一 「展望台 日本のなるもの」(読売新聞) 六月九日

前田河廣一郎 「日本的なもの」上・中・下(読売新聞) 六月二六・二七・二九日

杉山平助 「国民文学私見」(文芸) 七月

三木清 「世界史の公道」(新潮) 七月

保田與重郎 「白鳳天平の精神」(新潮) 七月

室生高信 「日本の行くべき道」(新潮) 七月

スポーツ・ライト(XYZ) 「文学者と『日本的なもの』ほか」(新潮) 七月

三枝博音 「思想に於けるノアの洪水——文芸に於ける日本的なもの」(新潮) 七月

中河與一 「万葉の精神」(千倉書房) 七月

谷川徹三 「現代日本の文化的状況」(中央公論) 七月

岸田日出刀 「美しき美 建築に探る日本的なもの」(東京朝日新聞) 七月七・八日

大熊信行 「槍騎兵 民族の論理」(東京朝日新聞) 七月七日

中條百合子 「文芸時評」(中外商業新報) 七月三〇日・八月一日・三日・四日

小林秀雄 「文芸批評の行方」(中央公論) 八月

亀井勝一郎・倉田百三・佐藤春夫・中河與一・芳賀檀・藤原定・保田與重郎 「時局と日本文化の使命」(いのち) 九月

矢崎弾 「中国で眺めた日本的性格」(新潮) 九月

青野季吉 「戦争とインテリについて」(改造) 九月

久松潜一 「源氏物語に見える日本的なるもの」(文学) 一〇月

大熊信行 「文芸の日本的形態」(三省堂) 一〇月

鶴見誠 「歌舞伎劇に於ける日本的なるもの」(国語と国文学) 二二月

中條百合子 「今日の文学の展望」(『発達史日本講座 第一〇巻現代研究』三笠書房) 一二月発禁 河出書房版全集八巻参照

戸坂潤 「『文化』の日本的観念をまづ検討すべし」(読売新聞) 一二月一〇日夕刊

【昭和十三年】

萩原朔太郎 『日本への回帰』(白水社) 三月

谷川徹三 「日本精神史の課題」(中央公論) 五月

河上徹太郎 「新日本主義文学の精神的地盤」(中央公論) 五月

杉山平助 「日本人と日本文学」(中央公論) 五月

長谷川如是閑 「日本文明の伝統的特徴」(中央公論) 七月

山口誓子 「あぶら臭い新日本主義」(新潮) 七月

三枝博音 「現代作家と日本的性格」(新潮) 七月

谷川徹三 「古い日本・新しい日本」(文芸春秋) 一二月

長谷川如是閑『日本の性格』(岩波新書、一二月)

【昭和一四年】

三枝博音「工と日本のなもの」(理想、一月)

矢崎弾「転向の日本の特性」(中央公論、三月)

尾崎士郎「日本の感情について」上・中・下(読売新聞、四月九・

一一・二三日夕刊)

島崎藤村「巡禮(続篇) 日本のなるもの」(改造、五月)

斉藤清衛『日本の性格の文学』(子文書房、一月)

【昭和一五年】

内田安久『日本の「場」の教育』(長宗書房、三月)

長谷川如是閑「日本の感覚の表現」(改造、一月)

中河和一「日本の全体主義」(読売新聞、一月二六・一七・二〇日)

【昭和一六年】

金原省吾『日本の表現』(教育美術振興会、一月)

長與善郎「日本の美への入門」(新潮、一月)

久松潜一『国学 その成立と国文学との関係』(至文堂、三月)

紀平正美『日本のなるもの』(目黒書店、六月)

石丸梧平『日本の教養』(偕成社、六月)

福島政雄『日本の思惟の諸問題』(人文書院、六月)

由良哲次『現代道徳思想 道徳の日本の性格』(理想社、八月)

平井昌夫「日本のなものと西欧的なもの」(書物展望、一月)

上村清延「リルケに於ける日本のなもの」(文庫、一二月)

【昭和一七年】

坂口安吾「日本文化私観」(現代文学、二月)

利根川東洋『生みの哲学 日本の世界観の論理』(理想社、二月)

大串兔代夫『日本の世界観』(同盟通信社、三月)

堤秀夫「日本のな科学」(東京朝日新聞、五月二一・四日)

穂積七郎「日本のなるものの維新性」(読売新聞、七月一五夕刊)

斉藤响「日本の美の側面」(新創作、八月)

西谷啓治『近代の超克』私論(文学界、九月)

三好達治・吉満義彦・鈴木成高・下村寅太郎・小林秀雄・亀井

勝一郎・中村光夫・西谷啓治・菊池正士・津村秀夫・諸井三

郎・林房雄・河上徹太郎「文化総合会議 近代の超克」(文

学界、一〇月)

斉藤响「日本のなるもの」(読売新聞、一月二二夕刊)

長谷川如是閑『続日本の性格』(岩波新書、一月)

岸田国士「戦争完遂への訓練効果 『矜り』と『嗜み』 日本

的な美しさを活かせ」(東京朝日新聞、一月二〇日)

【昭和一八年】

斉藤响『日本の世界観』(朝倉書店、一月)

船山信一「近代の超克と科学精神」(科学思潮、四月)

住田正一「日本のなるもの」(読売新聞、四月二四夕刊)

中村草田男「俳句文芸の日本の特性 芭蕉二百五十年忌を前に

して」上(読売新聞、七月二七日)

青野季吉「藤村の文学について 強い日本の体臭」(読売新

聞、八月三日)

長谷川如是閑「日本の人生観」(東京朝日新聞、一〇月一日)

鈴木重雄「日本の性格」(中央公論、一月)

【昭和一九年】

杉靖三郎「科学の日本的性格」(読売新聞)二月九日夕刊)

鈴木大拙『日本の靈性』(大東出版社、一月二)

【付記】

昭和一五年以降、「日本的なもの」「日本的なるもの」という語はあまり目立たなくなるが、その代わりに「日本の科学」や「日本の世界観」というように、「日本的な」「もの」の意味内容を限定した表現の方が多くなる。それ故、昭和一五年以降は、本文中に「日本的なもの」「日本的なるもの」の語が見られない資料も(網羅的ではないが)挙げている。

【注記】

- 1 『宮本百合子全集』第一一巻(新日本出版社、昭五五・一)参照。
- 2 保田は、「日本的なもの」という語を使用する代わりに、「日本の血統」(『戴冠詩人の御一人者』の緒言、東京堂、昭一三・九)といった言い方を用いる。
- 3 『定本横光利一全集』第三巻(河出書房新社、昭五七・七)参照。横光の他の著作も河出書房新社版全集を参照、引用した。
- 4 座談会「日本精神及び文化とは何か」(『新潮』昭二・四)で、窪川鶴次郎は、新感覺派文学など「震災後の日本の文学といふのは、何か、日本の文学伝統とは関係のないやうな気が非常にした」と述べている。
- 5 当時、「日本的なもの」とともに「日本的なるもの」という言葉も併用され、「日本の特殊性」、「日本的性格」という言い方も見られるが、特に区別してこれらの用語が用いられたわけではないので、本稿では(日本

的なもの)という語で一纏めにした。

6 『定本佐藤春夫全集』第二一巻(臨川書店、平一一・五)参照。佐藤のいう「もののあはれ」とは、「極度の深切な感情を以て人生に臨むこと」であり、「対象と同化し切つて、同じ涙を深く蔵しながら殆んど同じく泣き濡れようとする一歩手前で辛うじて踏みとどまつて客観を維持してゐる」状態とする。

7 小林秀雄も『日本のなもの』の問題」(月刊文章)昭二・四)で、「『日本のなるもの』といふ今日の問題は『大衆的なるもの』といふ問題と引離しては考へられぬ。」としている(『小林秀雄全集』第五巻、新潮社、平一四・二)。

8 『日本のなるもの』研究』では、「日本的なるもの」とは『日本』をして日本たらしむる所のもの」で、「日本たらしむる所」の形式的特質として「純潔明朗」「一貫的統一」「結合力、団結力」「包容力、同化力」「雄々しさ、反発性」「単純、淡泊」「現実的、實際的」「自然的」といった性質を挙げている。

- 9 『三木清全集』第三巻(岩波書店、昭四二・一〇)参照。
- 10 『萩原朔太郎全集』第一〇巻(筑摩書房、昭五〇・九)参照。
- 11 ヘルンも、『東の国から』(一八九五年、ポストンとロンドンで同時刊行、『小泉八雲全集』第四巻、第一書房、昭二・二)の「柔術」において、「膨張侵略の長い歴史」を持つ西洋文明も終末期に近いと意識していた。しかし、日本でヨーロッパの危機意識が関心にのぼるようになるには、列強諸国に対抗しうるだけの近代化⇨西洋化が成し遂げられてからであり、西洋崇拜の夢から覚めて日本を再認識しようとする気運が高まった中で彼の著作も読まれた。

12 「文学界」昭和一七年九、一〇月号で特集されたシンポジウム。その議論は、翌年七月創元社発行の『知的協力会議 近代の超克』にまとめられた。参加者は、西谷啓治、小林秀雄、諸井三郎、亀井勝一郎、鈴木成高、林房雄、菊地正士、三好達治、下村寅太郎、津村秀夫、吉満義彦、中村光夫、河上徹太郎。このシンポジウムを指す場合は「近代の超克」、

論議全般を指すときは「近代の超克」と表記する。

13 「吾々の立場から」では、「日本の意味に於ける近代の超克は、吾々自身を築き上げる事」だが「その直接の意味は西洋を超克する事」だとする。

14 『旅愁』の「古神道」について、拙稿「戦時下の横光利一と『みそぎの精神』——近代科学の超克としての古神道（上）——」（『近代文学論集』平九・一一）で言及。「横光利一における二〇世紀の『数学』的問題——近代科学の超克としての古神道（中）——」（『近代文学論集』平一〇・一〇）や「横光利一における（近代の超克）と知性の改造——近代科学の超克としての古神道（下）——」（『近代文学論集』平一一・一〇）では、横光の古神道と科学主義の超克の問題、〈近代の超克〉論議の関わりについて論じた。

（九州大学大学院比較社会文化研究院特別研究者）